

入浴者に異変 自動で排水

工業試など、高齢者溺死防止へ機器

家庭の浴槽での溺死者数の推移



道立総合研究機構工業試験場(工業試、札幌)と医療機器販売のメディカルプロシエクト(静岡市)は、入浴している人の呼吸数と心拍数を測り、異常を検知するとアラームを鳴らして排水する機器を開発した。高齢者の入浴中の事故を防ぐ狙い。同社は来年春までの販売を目指している。

入浴している人の呼吸や心拍による微細な振動を感知。センサーは、1分間で10〜25回の呼吸数と1分間で40〜90回の心拍数を正常値として、その値から30秒間外れるとアラームを鳴らして異常を知らせる仕組みだ。同時に自動的に排水することで溺死を防ぐ。

マットは12センチ四方で厚さは約1センチ。浴槽に設置すれば、体に直接触れなくても感知する。既存の浴槽に付ける場合は工事が必要だが、浴槽内に敷くマットもある。マットとアラームが十数万円、自動排水の機器が数万円となる見込み。マットとアラームのみの設置も可能。同社は浴槽メーカーを通じて販売する予定だ。

消費者庁によると、家庭の浴槽での溺死者数は全国

呼吸、心拍を測定 来春販売目指す

で年間約4800人(2015年)と10年間で約1・4倍に増加しており、約9割が65歳以上だ。

浴槽内での事故はのぼせたり、急に立ち上がったたりして貧血状態となり、意識障害を起こして溺れる例が多い。

同社は「全ての事故が防げるわけではないが、高齢者がいる家族や介護施設の職員の見守りの役に立ててほしい」と話す。

東京都大の早坂信哉教授(公衆衛生学)は「溺れた場合、3分以内の発見で蘇生率が大きく変わるのでアラームで知らせてくれれば生存率が高くなる。自動排水もされれば、気付くのが遅れても死亡するリスクを低減できる。浴槽内での死亡事故防止に有用ではないか」と話している。